第２学年
英語科通信

THE TSUKUBA ENGLISH TIMES

号外⑦　2010. 9. 16
第2学年英語科発行

＜息子と2人で行った＞
アメリカ西部アドベンチャードライブ旅行の記録（その7）
10-Day Adventure Driving Tour in the U.S.A.

by Nory Koinuma

（第7回：最終回）旅のデータとこぼれ話

過去６回にわたって旅の準備段階から帰国までの道のりをレポートしてきました。最終回の今回は、旅のデータとこれまでには記さなかったエピソード、そして今回の旅から学んだこと等を紹介します。内容が多岐にわたるので、４ページ拡大版です。

１．旅のデータ

私は昔からよく旅をするときに細かい記録をつけています。例えば、オートバイで日本中を走ったときも行程表を含めた日記を毎日書き、それは厚いファイルになって今も旅の思い出として本棚に残っています。今回の旅についても、帰国後に英語科通信としてレポートするつもりでいたので、できるだけ細かい客観的データを残しておこうと思いました。幸いなことに、息子も今回の旅の記録を夏休みの自由研究としてまとめることを計画していたので、事ある毎に彼のノートにデータを記録しておいてもらいました。

(1) 旅行場所の位置と行程　　※息子の自由研究掲示用模造紙より

右上の地図からもわかるとおり、西部のごく一部の地域しか訪れていません。それでも総走行距離が約4,000kmに達したことから、アメリカがいかに広いかがわかります。

(2) 10日間の道のり

日	宿泊地*	主な観光場所	天気	気温	走行距離	歩数
1	サンフランシスコ(C)	ゴールデン・ゲート・ブリッジ、ロンバード・ストリート	晴	17℃	45km	13,000
2	マリポサ(C)	ケーブルカー、フィッシャーマンズ・オォーフ、ヨセミテ	曇晴	40℃ 11℃	440km	10,386
3	ダイヤモンドバー(C)	ギングズ・キャニオン、セコイア	晴	35℃ 20℃	675km	7,513
4	ダイヤモンドバー(C)	ディズニーランド	晴	15℃	64km	11,806
5	メスキート(N)	ラスベガス、フーバー・ダム	晴	45℃ 15℃	643km	5,348
6	チューバシティー(A)	ザイオン、グランド・キャニオン マーブル・キャニオン、ナバホ橋	晴曇	28℃	662km	9,023
7	フラッグスタッフ(A)	モニュメント・バレー	曇雨	24℃ 18℃	483km	3,491
8	バーストー(C)	アリゾナ大隕石孔	晴	36℃ 19℃	718km	7,405
9	ロサンゼルス(C)	ハリウッド	晴	26℃	220km	7,902
10	機内		晴	18℃	5km	11,565

*(C)カリフォルニア州 (N)ネバダ州 (A)アリゾナ州　　気温は実測したもののみ

(上段は最高気温、下段は出発時)

【考察】

天候に関しては、太平洋に面したサンフランシスコとロサンゼルスを除けば、かなり厳しい暑さでした。今年の日本は例年にない酷暑の夏が続きましたが、アメリカでも異常気象により相当厳しい暑さの毎日が続いているとのことでした。

次に、走行距離については、市内を走っただけの３日間を除くと、１日にかなりの距離を移動をしていたことがわかります。ちなみに、残り７日間の平均走行距離は549kmで、これは東京－大阪間の距離に相当します。日本では経験的に250～300kmくらいが観光を含めた１日の移動距離なので、今回はその約２倍の距離を走ったことになります。これだけ走れた理由は、①田舎道を含めてほとんどの道が高速道路である、②観光地の間が離れているので１日に寄れる場所の数が限られている、ということでしょう。もっとも、訪問地が国立公園中心であったことを考えると、それぞれの場所でもっとじっくり時間を過ごすという方法もあったのですが､それはまたの機会に譲りたいと思います。

２．こぼれ話

(1) アクシデント

今回の旅で一番警戒していたのが何かしらのアクシデントに遭うことでした｡例えば、一番心配したのが交通事故。次に心配だったのが貴重品の盗難。そして命に関わるような事件に巻き込まれることでした。しかし、幸いなことに、いずれのアクシデントにも遭わずに済みました。もっとも、26年振りに左ハンドルで右側通行をしたので、よく心配される交差点を曲がる際に反対車線に入ってしまうということが７日目の朝に一度ありました（あわてて正しい車線に戻りました…汗)。それから、初日と２日目のサンフランシスコ市内のドライブで、車両感覚がまだよくつかめていなかった時期に、右側に車を寄せた際に縁石でタイヤを２度こすってしまったということもありました。

とにかく、何のアクシデントもなかったという報告が家族への最大のお土産でした。

(2) 英語でのコミュニケーション

① 必要なツール

久しぶりに海外旅行をすると、英語が話せるというのは重要なことであると改めて思いました。特に、今回のように他に頼る人が誰もいない状況下で旅をする場合は絶対に必要なツールであると改めて感じました。例えば、宿の予約、買い物、何か不明なことがあった場合の質問、トラブルの連絡や交渉というような事態が生じた時にそれが威力を発揮してくれました。ただ、電話で話したときだけは、困った状況下で精神的に余裕がなかったこともあって言いたいことがうまく伝えられず、また相手の言っていることもよくわからなくて、意思疎通がうまくできませんでした。ただ、日本語でも電話だと真意が伝わらないことがあるくらいですから、仕方のないことだったのかもしれません。

② あると嬉しいツール

昨年春にシンガポールのホアチョン中学校へ生徒の引率をした際、一緒に行った植野先生から「肥沼先生って、気がつくと見知らぬ人と友達になっているから面白いですね」と言われたことがあります。確かに、特に用事もないのに近くにいる人に話しかけてしまう性癖（？）があり、また他人からも話しかけ易いように見えるのかよく話しかけられます。今回の旅でもそういうことが地元の人や旅行者との間に何回かありました。そこで、思い出せるかぎりその内容を紹介したいと思います。ただし、必要があって話した事務的なことは除きます。

○サンフランシスコのホテルで品の良さそうな50代の夫婦とエレベーターに乗り合わせたので、Where are you from?と尋ねたところ、We are from Mexico City.とのことでした。もちろん、これと反対の問答とその他の会話を短い時間の中で行いました。

○ヨセミテ公園の入口でアメリカ人の小学生に Hi. How are you?と話しかけられました（アメリカ人は通りがかりに目が合うと何かしら挨拶をします）。そこで Where are you from?と尋ねると、I'm from Kansas.ということでした。その子と話していると父親もやってきました。I used to live in Omaha, Nebraska.と言うととても興味をもってくれ（ネブラスカ州はカンザス州の北隣りだからです）、さらに彼が I went to Tokyo last winter.と言って話がしばらく続き、Have a safe drive!と言って別れました。

○ヨセミテ近くの中華レストランで、オーナーがお店の客やテイクアウトの客から日本では考えられないようなクレーム（「味が濃い」等）を受けていたのが聞こえたので、愚痴を聞いてあげようとレジで You've got a lot of troubles today, huh?と話しかけたところ、「毎日のように文句を言う客がいて困っている」とこぼしていました。

○キングズキャニオン公園のコンビニの外にあるベンチで昼食をとっていたところ、少し離れた場所に座っていたおじさんに Where are you from?と話しかけられました。日本から来てドライブしているという内容を伝えると驚いていました。彼は1945年生まれの元空軍のパイロットだったそうで、今は地元で bee keeper をしており、「この近辺でハチミツを買ったら、それは自分が育てた蜂によるものだ」と言っていました。

○セコイア公園の帰り道の山中で車の列が急に停まって動かなくなってしまったので、後ろのレッカー車が事情を知っているのではないかと話しに行きました。すると、この先が崖崩れで片側通行になっており、しばらく動かないことがわかりました。そこで乗っていた夫婦と車が動くまで話をしました。最後に、If you want to eat a real American food, you should go to a Mexican restaurant. というアドバイスをくれました。

○ダイヤモンドバーのモーテルで、中東系の受付係の男性と割引料金になる・ならないの交渉をしつこくしているうちに知り合いになり、顔を合わせる度に話しかけてくるようになったほか、わざわざ翌日のモーテルの予約をしてくれました。

○ディズニーランドで２度目のビッグ・サンダー・マウンテンに並んでいたとき、前にいたおじさんが一人だったので話しかけてみました。その人はオーストラリア人で、奥さんと息子さんの３人で来たものの、２人が先に行ってしまったので一人になったのだそうです。また、彼らは北京→ウラジオストック→［シベリア鉄道］→モスクワ→アムステルダム→（後は忘れた…）と旅をしてからロサンゼルスに来たそうです。

○ダイヤモンドバーのメキシコ料理店で東洋系のウェートレスのおばさんが Where are you from?と尋ねてきたので会話が始まりました。彼女は韓国人で、I've lived here more than 20 years.とのことでした。その後も通りかかる度に話しかけてくれ、息子にお菓子をくれたりしました。同じ東洋人同士で親近感をもってくれたようです。

○ラスベガスへ行く途中のガソリンスタンドでコーヒーを飲んでいたところ、ハーレーに乗ったおじさんがいたので話しかけました。彼は息子とラスベガスにいる孫を迎えに行く途中とのこと。私が以前ハーレーに乗っていたことを伝えると話がはずみ、彼のハーレーにまたがった写真を撮らせてくれました。私が My wife will be angry to see this.と言うと、Tell her you bought a new Harley in the States! と気の利いた答えを返してくれました。

○フラッグ・スタッフのレストランで、客が引いて暇そうになった担当ウェートレスの Jennifer をテーブルに呼び、話に付き合ってもらいました。自分たちが食べた料理がどこの国のものかわからなかったので彼女に聞いたのですが、彼女もわからないとのことでした（店長さんに聞いても知りませんでした）。そして、最後に息子とツーショットの写真を撮らせてもらいました。

○アリゾナ州のコンビニで買い物をしたとき、レジの若者がとても感じのいい人だったので、支払いを済ませたあとに話しかけてみたところ、彼はナバホ族の出身であることがわかりました。これまでに旅した場所を話すと、彼は I'm from a small village near here, but I went to Grand Canyon last year for the first time.と言っていました。また、彼は私が話した最初のネイティブ・アメリカンでもあったので、写真を撮らせてもらいました。

○バーストーのモーテルで洗濯をしていると、フランス語を話している親子と一緒になったので話しかけてみました。すると、もうすでに１ヶ月くらいドライブをしているとのことで、バカンスの国フランスならではだなと思いました。私が We have only 10 days. と言うと、「それしか休みがないのか？」と驚いていました。

○バーストーのモーテルで朝食をとっていると、テキサスから来たというおじさんに話しかけられました。内容は多岐にわたっていたので覚えていないのですが、テキサスなまりの早口で話されたので、半分以上の内容がよくわかりませんでした（適当に相づちを打って話を聞いていました）。最後に大きな手を出して握手を求められ、I'm John. Nice meeting you. と笑顔で言われました。もちろん、こちらも握手をしながら I'm Nory. Nice talking with you, John. と応じました。

【終わりに】

最後に、今回の旅で自分が学んだことを記して本レポートを終わりたいと思います。

まず、久しぶりに自分の英語運用力の確認ができ、実力をさらに磨かなければならないことがわかりました。一方、出会った地元の人や旅行者と交流することで、多少なりとも国際理解に貢献できたように思います。

次に、当初の目的にあった息子との絆を深めることについては、10日間一緒に生活するという濃いつきあいの中でそれなりに達成できたと思います。自分が父親としての存在感をどこまで示せたかはわかりませんが、息子のことを理解するという点では大きな収穫がありました。特に、６日目の宿がなかなか見つからなかったという騒動の中でも黙って父親を信じてくれ、モーテルに着いてからの貧相な夕食にも文句１つ言わずに耐えてくれた彼の強さには感心しました。そして、息子の父親に対するそうした配慮の心に感激し、その夜の彼の寝顔を見ていたら、自然に涙が頬を伝わってしまいました。